

歌掛けにおける旋律の機能

梶丸 岳

東アジア及び東南アジア一帯には古くから広い地域で「歌掛け」が行なわれていたことが知られている。人間同士が歌を掛け合うこの「歌掛け」には様々な様態がある。例えば中国西南部やブータンでは単純で種類も少ない旋律に、即興で歌をつけて歌を掛け合う。その一方で奄美地方では旋律が複雑で多様になる一方歌詞の即興性はほとんど失われている。このような状況をふまえた上で、本論では歌掛けにおける旋律の機能を明らかにすることを目的とする。

まず本論では中国貴州省のプイ族を対象に筆者の行なったフィールドワークで得たプイ族の歌掛け「プイ山歌」の資料を分析した。その結果その旋律は比較的単純で一地域にほぼ一つであり、異なる地域の旋律で歌われた歌は、たとえ同じ言語で歌われていても歌詞が聞き取れず、そのような歌は聞こうともしないことが分かった。この歌詞が聞き取れなければ鑑賞対象とならないという状況から、プイ山歌が西洋的な「音楽性」とは異なる音楽性を持っていると考えられる。

生明は雲南省に住む少数民族の歌を分析する中で「言語機能音階」論を唱えた。これは西南中国における歌において旋律が言語の記憶と伝達において機能しているということを指摘したものである。彼の「言語音階性」をウィトゲンシュタインの言語ゲーム論における、理解の基盤としての「文法」や情報学における「差異を作る差異」というものに相当すると考えれば、プイ山歌の旋律は「言語音階性」を強く持っていると言える。またテュリノがパース記号論を基に論じた音楽の感情的価値論から見て、プイ山歌には同時に感情的機能もわずかながらあると考えられる。

奄美において歌掛けはそこから旋律を美的に鑑賞する「音楽的音階性」が強い形態に変化したと考えられる。これは歌掛けにおける旋律の機能の変容であり、歌掛けにおけるコミュニケーション・チャンネルの変化として見ることができる。